

東北帝国大学と和算史研究VI

《平山諦と和算(1)》

鈴木武雄^{*1}



豊田町のご自宅にて、『関孝和全集』を手に
平山諦 91歳9ヶ月(1996年6月9日撮影)

はじめに

和算史に多少なりとも興味関心がある方々ならば、平山諦の名前のある著書を読んだことがあると思います。例えば、『関孝和全集』、『東西数学物語』、『方陣の研究』、『円周率の研究』などを讀んだり見た人は多いと思います。

しかし、平山諦はどのような人であったのか、あまり知られていないと思います。業績にしても、その全貌はほとんど知られていません。その生涯にしても、ほとんど知られていないと思われます。平山諦は1904年(明治37年)生まれで、1998年(平成10年)死去していますから、存命中に交流のあった人々も、少なくなってきました。そこで平山諦の業績と生涯を研究することによって、“和算史研究とは何か” “和算史研究の意味(意義)は何か”などが少しでも明らかになるかとも思われます。

和算史研究は地味(マイナー)な研究分野であり、文系(歴史)と理系(数学)との融合的な分野です。しかも、和算は江戸時代に栄えた文化ですから、言語的にも近世の日本語(変体か

*1 日本オイラー研究所・元掛川教育センター,E-mail:pk755733@da2.so-net.ne.jp

な)や漢文ですから、理解が簡単ではないこともあります。数学だけに限っても易しくないといよりも非常に難しいものもあります。これだけの悪条件(?)が重なりますと、和算に多少の興味や関心があったとしても、和算史研究に深入りすることを断念しがちです。

私が「東北帝国大学と和算史研究」というタイトルで連続してお話をさせて頂いているのは、これまで和算史がどのように研究されてきたのかを明らかにしたかったからです。それは直接の師である平山諦(先生)が“生涯を捧げた和算史研究とは何か?”“なぜ平山諦は和算史研究に生涯を捧げたのか?”という私自身の疑問(?)を解き明かすことでもあります。それは“和算史研究は生涯を捧げるだけの価値あるものか?”ということもできます。本稿では平山諦の生涯を家族、恩師、友人知人などの関係から和算史研究への道を記します。平山諦先生をはじめ皆様方の敬称を省略させていただきました。ご容赦をお願いいたします。

I. 平山諦の略歴

- ・ 1904年(明治37年)8月13日千葉県成田生まれ
- ・ 1922年(大正6年)千葉県(私立)成田中学校卒業
- ・ 1927年(昭和2年)第二高等学校卒業
- (* 1929年(昭和4年)林鶴一教授、退職)
- ・ 1930年(昭和5年)東北帝国大学理学部数学科卒業
- (* 1935年(昭和10年)林鶴一名誉教授、松江で逝去)
- ・ 1941年(昭和16年)東北帝国大学理学部講師
- (* 1942年(昭和17年)藤原松三郎教授、定年退職)
- (* 1946年(昭和21年)藤原松三郎名誉教授、逝去)
- ・ 1950年(昭和25年)東北大学より理学博士の学位を授与
- (* 1951年(昭和26年)泉信一教授、東北大学を退職し東京都立大学へ)
- ・ 1968年(昭和43年)東北大学を定年退職(*3月31日助教授・教授)
- ・ 1982年(昭和57年10月)仙台市より静岡県磐田市近郊へ転居
- ・ 1998年(平成10年6月22日)静岡県磐田市で逝去(93歳10ヶ月)

II. 平山家の人々

平山諦は1904年(明治37年)8月13日千葉県成田で生まれました。父親は平山清助、母親はきよといい、その長男として生まれました。姉の栄子と妹のまさ子がいました。父清助は総武銀行から、成田郵便局長をしていました。平山家はもともと成田草分十七家のうちにあったとのこと^{*1}。姉栄子は伊藤家に嫁ぎました。平山家にとってたった一人の男子で長男であった平山諦が学問の道に専念できたのは、父母の理解と愛情があったようです。父清助自身が学問好きであったこともあります。後に妹まさ子が婿養子を取り平山家の事業を引き継ぎました。平山家の特徴は、兄弟姉妹及びその子供たち(甥と姪)との非常に親しく温かな関係です。そのことは『平山諦先生長寿記念文集』(1996年(平成8年)刊)

*1 私家版『和算の誕生(後編)』附録 p.1

に掲載されている9名の甥と姪の方々の文章から窺えます。また同年8月13日(*平山諦の誕生日)に磐田市にある赤煉瓦の塀が残る旧赤松則良邸(*旧幕臣、海軍造船中將・男爵)で長寿記念会を御家族と御親戚が多数出席されて開催されました。そのとき筆者も出席し甥と姪の方々と親しく懇談をし、平山諦の素顔を知りました。さて、平山諦は1937年(昭和12年)4月22日32歳のとき、海谷和子と結婚しました。海谷家は仙山線楯山駅近くで(*現在の山形市風間)医家でした。その家族関係者も医家です。海谷和子は平山諦が山形県立第一高等女学校講師時代の教え子でした。平山諦の結婚を心配した姉栄子と妹まさ子の配慮によります。「平山諦宛の年賀状の中から選んだ」というエピソードがあります。それほど兄弟姉妹の仲が良好でした。

Ⅲ. 学習時代

1917年(大正6年)平山諦は私立成田中学校(*現在の学校法人成田山教育財団成田高等学校)へ入学し、1922年(大正11年)同校を卒業しました。1923年(大正12年)第二高等学校に入学し、1927年(昭和2年)同校を卒業しました。筆者が第二高等学校を志望した理由をうかがったところ、「成田中学校の先輩に泉熱で著名な医学者泉仙助がいたから」また「それほど確たる理由があったわけではない」とも言っていました。第二高等学校時代の印象について語ることは少なかったです。同年東北帝国大学理学部数学科に入学し、1930年(昭和5年)同大学を卒業しました。東北帝国大学時代の自筆の数学ノートがいくつも残っています。それから推測すると数学基礎論などに関心を持っていたように思います。欧文数学書も多数残っています。それには数学史的なものや数学遊戯的なものも含まれています。最終学年では林鶴一教授の卒業研究(ゼミナール)で和算の研究をしました。ただし、1929年(昭和4年)5月に林鶴一教授は、突然退職していましたが、名誉教授・講師として指導されたと思われます。平山諦の大学生時代の林鶴一との関係について、東北帝国大学理学部自修会『自修会報(第21号)』(昭和10年12月)に「林先生の和算に於ける一側面」と題して7頁も書かれています。この第21号は、「故林先生を悼みて」として岡田良知、平山諦、村松勇夫、数学教室一学生の4名がそれぞれ追悼文を書いています。尚、口絵として林鶴一とその葬儀の写真2枚があり、さらに藤原松三郎と鈴木敏一の弔辞が掲載されています。平山諦の追悼文に戻ると「晩年に於て親しく接し、和算及び和算史の御意見を聞く機会が多かった私は先生に対する思慕の念を禁ずるを得ない。」「昭和八年四月六日にはわざわざ千葉県の一寒村まで一和算家の除幕式(*剣持章行先生碑)に赴かれた。この時私は終始先生のお供をしたが……」平山諦が同行したのは、千葉県出身ということもあったと思われます。さらに「東北帝国大学数学教室に於ける先生の和算に関する講義は昭和三～四年が最後であった。此時は袴腰問題及び極形術に就いて述べられた。」とあり、この講義は平山諦が大学2年3年時です。林鶴一の最終講義に出席したのです。

Ⅳ. 修行時代(林鶴一との師弟関係)

平山諦は大学卒業後研究室に在籍しつつ、各地の中等学校で講師をしていました。大学内では風呂のある集会場でみんなで和気藹々と過ごしていたといえます。同級生として本部均(*北大→九大→都立大→東海大)とは親しくされて、平山諦の研究を終始支援してされていました。筆者も本部均とは格別に親しく交流させていただきました。他に同級生として

近藤基吉(*北大→都立大→東海大)や高橋進一(*名工大)などの名前を聞きました。

1932年(昭和7年)平山諦は、中等学校講師を退職して東北帝国大学理学部副手になっています。

このころから第二次世界大戦まで平山諦の刊行された著作は、本人がそれぞれ分厚い『平山諦集書Ⅰ』『平山諦集書Ⅱ』『平山諦集書Ⅲ』『平山諦集書Ⅳ』として残してあり、すべて判明しています。その最初は1933年(昭和8年)「剣持先生の二三の著作に就いて」(古城村教育会教育会報)です。次が1934年(昭和9年)「算法闕疑抄と算法新書の異本」(林鶴一共著, 財団法人齋藤報恩会時報)です。1935年(昭和10年)8月「環円簾術」(東京物理学校雑誌第525号)、同年9月「三斜三円術」(東京物理学校雑誌第526号)があります。この論文には林鶴一による附記「Malfatti問題ノ歴史」があります。この論文の経緯について『自修会報』(第21号の林鶴一追悼文)で「本年(*昭和10年)六月二十一日わたしが友人と一緒に先生を訪ねた時の話に、日本に於けるマルハッチ問題が話題に上った。」その翌朝の日付の葉書、さらに翌々日二十四日付けの葉書、また二十七日に「三斜三円術に続き三斜四円術を説明せよ・・・」という葉書を頂いたことを書いています。

この間のことを平山諦は筆者に「何かよいことを見付けないと林先生のところへ訪問できなかつた」と述懐されていました。ただ、何かにつけ平山諦は林鶴一宅を訪問していました。あるとき日本評論社の社員が来訪し関孝和全集の出版を求められたが断っています。その際に雑談の末「この全集は君たちの手で出版すべきだ」と言葉を結んだといひます。上記の2編論文が林鶴一と平山諦の共著です。「私が先生に面会した最後の日は(*昭和10年)九月二十二日であつた」(*『自修会報』(第21号の林鶴一追悼文))と平山諦は書き残しています。

この平山諦と恩師林鶴一との関係は1935年(昭和10年)10月4日に林鶴一が松江で客死することにより終止符を打つこととなります。林鶴一の生前において和算関係の論文は多数あつたが、著作は『幾何と代数との語源に就いて』(東京開誠館, 昭和8年月日発行)『和算ノ初歩』(東京開誠館, 昭和10年1月23日発行)と『本邦編曆史』(東京開誠館, 昭和10年3月日発行)という小冊子しかありませんでした。平山諦は亡き恩師林鶴一の業績を世に残すために全力を傾けることとなります。その結果が1937年(昭和12年)『林鶴一; 和算研究集録』上下(東京開成館)です。この論文集は上1102頁, 下1038頁という大著です。それを2000部出版しました。この編集は藤原松三郎教授の指示で、平山諦がほぼ独力で編集校正をしました。平山諦は「柳原吉次が助けてくれた」とも語ってくれました。藤原松三郎は編集を平山諦に指示して自身はオスロの世界数学会議へと出発しています。(*藤原松三郎「余の和算史研究」『科学史研究』第11号, 1947年7月, p.79)このとき藤原松三郎のベルリンから平山諦宛の絵葉書が残っています。後年平山諦は筆者に本書を持ちながら様々なことを語ってくれました。平山諦の当時のノート類や数学書を調べてみると和算以外のものがたくさんあります。平山諦自身も必ずしも和算研究だけをを進めることとは思っていなかったといひます。しかし、恩師林鶴一の急死とそれにとまなう『林鶴一; 和算研究集録』の編集に心血を注いだことにより、和算研究へと重点を置くようになったと思われまふ。

この時代のことですが、平山諦と林鶴一の娘キン(*結婚後小谷キン)との結婚話があつたようです。キンは林鶴一のただ一人の末娘でした。小谷キン(著)『今日までの私』(私家版か, 1991年10月30日, p.51)の中で、

「父の葬式の時、大学の数学教室の人で、破れ袴をはいて来て、人目を引いた人がいた。Hさんである。その後しばらくして慎悟兄に「T・Hさんという人がお前と結婚したがつているよ。聞いてみてくれとのことだったよ」と言われた。私は破れ袴を想像しておかしかつた。結婚なんて、遠い遠い世界のことに思っていたけれど、数え年二十才だから、その時代が、女学校を出てすぐお嫁に行ってもおかしくない頃だったし、彼の方は私より十才位年上だから適齢期であった。結局私はこのはなしをえを断つた。よい人だし、いまでも主人(*広島大学教授小谷鶴次)のところへ年賀状が来る。父の思い出の書類を送ってくれたりした。この人と結婚していたら、別の世界が開けたのだろう。戦争中、この人は肺病に苦しんだけれど、私がなめた陰湿な苦勞とは別の、精神的には明るい結婚生活だったかもしれない」

と書いています。林(小谷)キンは大正5年(1916年)6月生まれです。このT・Hさんとは平山諦のことであることは間違いありません。たぶん諦を「てい」と呼んでいたのです。この本にあることはキンの言い分です。筆者が家族から聞いていることはその反対のことです。双方の言い分はともかくとして、事実は霧の中にかすんでいます。筆者自身は平山諦自身からこの本を見せながら「(キンが)わがままだった」ということを聞きました。キンは「男四人の末の一人娘として育つた」と書いていますから、それも想像されます。いずれにしろ後年本書を贈るなど二人の交流が続いていたことは事実です。また、1937年(昭和12年)4月22日に前記のように平山諦は海谷和子と結婚していますから、ちょっとしたエピソードにすぎません。このころのことを平山夫人(和子)からいろいろと聞きました。平山諦は給料のすべてを和算書などの購入に充てていたので、生活費は千葉の実家が仕送りをしてくれたとのことでした。当時の若手の学者生活の一端を垣間見せてくれます。それから平山諦が恩師林鶴一の生活態度をマネて例えば「封筒は丁寧にはがして返し再利用した」といいます。筆者への手紙にも封筒を再利用したものがありました。これは「(林鶴一)先生の性格を物語るに“節約”の二字が大きな役割を演ずる。」その具体例として「曾て私が二枚続きの洋罫紙の一枚を白紙のまま(*林鶴一)先生に提出した時は甚だ叱られた。」(*『自修会報』(第21号の林鶴一追悼文))という一文からも分かります。

V. 学究生活(藤原松三郎との師弟関係)

1936年(昭和11年)頃から藤原松三郎は林鶴一の急死を契機として、それまでの数学研究を絶つて和算史研究に邁進することになりました。このことは平山諦に大きな影響を与えることとなります。藤原松三郎は帝国学士院会員でありましたから「和算の研究の基礎的な事業たる和算書総目録の調査を目的として、昭和12年14年に至る3カ年間帝国学士院の補助を受け(一カ年1000円)史料の購入の外、平山君と共に調査に着手した。*1」(*藤原松三郎「余の和算史研究」『科学史研究』第11号、1947年7月、p.79)とあることから、平山諦との関係が分かります。このときの調査の結果は大判厚冊(*縦21.2cm,横32.5cm,合計厚さ10cm弱)

*1 この調査は戦災で焼失した水戸彰考館の和算書も含まれていた。この青焼き複写や写真版がいくつも残っていて貴重である。その一つが佐藤健一著、建部賢弘原著『建部賢弘の算曆雑考：日本最初の三角関数表』(研成社、1995年)である。

の自筆ノートになり現在も数冊が残っています。自筆ノート『著者名別和算書目録(一)；昭和14年7月』『著者名別和算書目録(二)；昭和14年7月』『和算書目録(一)；昭和14年10月』『和算書目録(二)；昭和14年10月』『和算書目録(三)；昭和14年11月』『天文曆書目録』など膨大な作業であったことが理解されます。この目録の一端は平山諦「塵劫記及び改算記目録」『東北数学雑誌；第45巻』として公刊されています¹。この注に藤原松三郎が書いていることから両者の関わりが分かります。またこの和算の史料調査研究によって『明治前日本数学史』(全5巻)が書かれる基礎資料となったのです。

1938年(昭和13年)春頃、藤原松三郎により遠藤利貞(原著)『大日本数学史』を再版出版する計画、さらに『関孝和全集』『大成算経』の出版計画がありましたが、種々の事情で中止となりました。

平山家としては1938年(昭和13年)1月長男(智啓)が誕生し、1939年(昭和14年)9月に長女(絢子)が誕生しています。平山諦が二人の子供たちを非常にかわいがったことは『平山諦先生長寿記念文集』に子供たち自身の言葉「幼い日の思い出より」「父にかかわった思い出」として書かれています。また、その中の一コマで「藤原松三郎先生のお宅へ妹と一緒にお使いに行ったことあった。」「父が東北大学から帰宅しそうな時間に、なん度か、迎えに行きました。」「(*父は)とにかくよく私達兄妹の遊び相手になってくれました。」などと幼い頃の思い出を書かれています。戦時下の和算史研究がどのようなものであったのでしょうか。長男(智啓)の思い出になかで「戦時下で、日本のこととは言え時局に役立つようなこともないことに打ち込む姿に、非国民という言葉が浴びせる近所の人もあったようだ。」とあります。現在の数学史研究者が少なくとも非国民と言われることはないでしょう。それもあって「(戦争に負けたとき)父はと見ると自室で悠然と腰掛け、鉱石ラジオを耳ラジオ(イヤホン)で聞いて微笑んでいた。父にとって日本の敗戦はあの戦争の当然の帰結だったのであろう。」書かれています。

元に戻りますが1937年(昭和12年)から、『東京物理学校雑誌』だけでなく『高数研究』や『日本中等教育数学会雑誌』、中等教育雑誌『〇年の数学』『上級数学』などへ非常にたくさん書いています。これらは『平山諦集書』としてまとめられています。

1945年(昭和20年)8月15日に敗戦までで、平山諦にとっていくつかの大きな出来事がありました。1941年(昭和16年)4月平山諦は東北帝国大学理学部講師として任用されました。これは1941年(昭和16年)東北帝国大学附属研究所として和算研究所が企図されその講師として任用されたようなのです。これらの処置が藤原松三郎によることは明らかです。和算研究所は他のいくつかの研究所と同時文部省に申請されたにも関わらず、しかも申請順位第二にもかかわらず認可されませんでした。その他の研究所は認可され現在も東北大学附属研究所として存在します。文部省は戦時下で和算研究など不要と考えたと思われる。このことは平山諦の大学内における処遇が微妙なものになっていくことに起因し

*1 現在の若手の研究者の中には、このころの事情を知らず、不十分と批判する者もいる。研究の歴史を知らずして残念なことである。現在でもいくつかの新史料が発見されていることから、調査研究に終わりはないのである。

ます。1940年(昭和15年)『文部時報(第680号)』^{*1}掲載「和算三」の末尾で藤原松三郎は「和算及和算史に関して未だ知られざる分野は猶多く残され居ると共に、和算書についても、今まで知られなかつた資料が猶出て来るのである。依て此方面の研究は益之を振作して、我邦の大学に於て、和算研究の若き学徒を容るべき一助手の席さへ欠如してゐることである。かかる状態がつづけば、遂には和算を理解する人は存在しない時代の出現を恐れるのである。」(*筆者下線)と書き残しています。このことは、帝国学士院会員で、二度の理学部長に就任し東北帝国大学総長に推薦された藤原松三郎にしても難しいことであつたのです。この状態はほとんど変わりません。和算史研究のように文理融合の学問は居場所がないのです。結局のところ現在での和算史研究は個人的な努力によってなされていると言えます。

1945年(昭和20年)8月15日の敗戦までで最も重要なことは、藤原松三郎による『明治前日本数学史』の執筆です。1943年(昭和18年)1月には、この執筆が始まりました。1944年(昭和19年)末までに執筆し終わっていました。従つて約2年ほどで執筆を完了しています。藤原松三郎の努力あるいは執念がいかに凄いものであつたか理解できます。この藤原松三郎の執筆において平山諦は史料の整理から原稿の清書と貢献しました。これらの事情について平山諦は藤原松三郎(著)『余の和算史研究』^{*2}の附記に書いてます。

「昭和15年紀元2600年に際会し日本学士院の日本数学史の編纂を担当するようになってから、一切の余事を避けて文字通り寝食を忘れて和算史の研究を精進した。準備も大体出来上がり、昭和18年1月11日を期して“自分には正月も盆もない”といつて朝から書齋に閉じこもり日本数学史の第一頁の執筆を始めた。爾来約2年間に8000枚の原稿を書き上げたことは先生の非凡の努力を物語つて余りある。」

と平山諦はその時の状況を活写しています。原稿執筆が完了した1944年(昭和19年)末という時期は、日本が敗戦へと向かつていた非常に厳しい時期でした。11月24日米軍マリアナ基地のB29爆撃機が東京を初空襲しています。8000枚の原稿を印刷する紙の配給もままならない状況でしたから、出版の見通しなどつかなかつたに違いありません。その後も戦況はますます厳しくなり、1945年(昭和20年)4月9日-10日B29の300機による大空襲が行われま12万以上に庶民が死傷しました。その後も、名古屋、大阪、神戸と空襲になりました。いよいよ7月9日夜、仙台が大空襲になりました。このことを平山諦は

「広からぬ先生の屋敷に大型の焼夷弾が4箇落下、母屋と十分離れた建てた書齋に1箇ずつ命中した。どちらも全焼した……。空襲が始まるや否や先生一家は防空壕に避難したとたんに焼夷弾に見舞われた。夢中で歩行困難な御夫人を肩にして半里(2km)余り台野原に避難した。」

このような悲惨な状況を現代の私達が想像すらできないと思われまふ。このとき藤原松三郎は「自分は日本数学史を記憶で再び書き直す決心だつた。」と思つたそうです。しかし、奇跡的にも「原稿はキッチンと防空壕に仕舞つてあつた。令息道太郎さんと御夫人道子さんの機転で、その日に限つて原稿を防空壕に仕舞つたのであつた。」しかし残念なこと

*1『東洋数学史への招待－藤原松三郎数学史論文集－』(東北大学出版会,2007年)p.65

*2『東洋数学史への招待－藤原松三郎数学史論文集－』(東北大学出版会,2007年)pp.7-8

に「調査に使ったノート類は一切焼いた。」です。「しばらくの間は息子道太郎さんが防空壕に泊まって番をすることにした。その間に病気の御夫人と幼い孫を山形県の田舎に連れていくことにした。7月12日山形に来てからは連日の雨で道太郎さんもうとう耐えられなくなって防空壕を土で嚴重に塞いで山形に来た。」その後防空壕が雨と地下水により筆筒の上に置いた原稿が危なくなっていました。「10余貫(*約40kg)の原稿をリュックサックに詰め、両手に提げた私の姿を見送った先生の眼には安堵の涙さへ輝くように見えた。かくして無事に原稿を山形の田舎へ移すことができたが、先生は“これさえ助かれば何もいらぬ”と度々口にされた。」

このように『明治前日本数学史』の原稿は、こうして藤原松三郎の家族が決死的な行動で一丸となり守られたのです。現在の私達の多くは、残念ながらこのような事を知らず和算史研究書の一冊としか見なさないと思われまふ。

しかしながら、平山諦の全生涯からこの時期を見ると、一番充実していたように思えます。特に危機的な状況に於ける藤原松三郎との師弟関係は感動すら覚えます。師弟両者の学問に対する純粋な誠実さが昇華された形で現れています。

VI. 苦難の時代

1945年(昭和20年)8月15日日本の敗戦によって第二次世界大戦は終結しました。平山諦は41歳になったばかりでした。意外なことに、平山諦にとって苦難の時代が到来したのです。この8ヶ月ほど前1945年(昭和20年)1月16日父清助が68歳で死去しました。1946年(昭和21年)10月12日恩師藤原松三郎が死去されました。1949年(昭和24年)7月18日母きよが70歳で死去しました。しかもこの年の11月頃から健康に優れず入院することになりました。肺結核でした。この頃の肺結核は不治の病でした。12月には毎日新聞文化賞を受賞しました。副賞賞金として関孝和全集出版費用20万円は返却せざるを得ませんでした。

特に、藤原松三郎の死去は、平山諦の学問生活や大学生活について大きな影響を及ぼすようになります。東北大学内で和算史研究に理解があった人達は数少なかったと思われまふ。東北大学数学教室の創業者であった藤原松三郎が生きていればこそその“和算史研究”です。東北数学雑誌も欧文数学雑誌になり、和算史研究は掲載しなくなりました。1951年(昭和26年)藤原松三郎の後継者であり平山諦の友人であった泉信一教授が東北大学を退職し東京都立大学へ移りました。この要因は私的なことからであったと聞いていますが、数学教室内に対立があったことは事実のようです。泉信一の弟子である土倉保から筆者が直接聞いたところでは、そのころ数学教室内で“和算について話題にするな!”と言われたとのこと。 “和算”という言葉すらタブー視されたのです。このような状況では東北大学数学教室内で平山諦の居場所は無いに等しかったに違いありません。これも土倉保から聞いた話ですが、当時数学教室とすれば数学研究で“欧米に追いつけ追い越せ”という雰囲気だったので和算史研究など無視されたのであろうと。ただ、数学研究にしても長期的な視点で見たとき、和算史研究は数学研究の独自性を輝かせるために、重要なことになると思われます。数学は普遍的に見えても、歴史的に見れば時代によって地域によって民族によって異なる発達を遂げてきました。日本の場合、何の数学の歴史のないところに西洋数学を移植したのではありません。いかに普遍的に見える数学でさえも歴史的文化的な

制約を受けています。

さて平山諦が結核が治癒したのは、妹平山まさ子などの努力によりストレプトマイシンを入手したからのようです。その直前まで家族は平山諦の死を覚悟したとのこと。1952年(昭和52年)春、平山諦はやっと快癒し退院できました。退院をしたものの著作に耐えられるようになったのは1955年(昭和30年)頃になってからのことです。

ところでこの平山諦の入院中に『明治前日本数学史』の原稿は無断で持ち出されてしまいました。それ以前にもこの原稿を持ち出そうとする動きがありました。藤原松三郎の最後の弟子で、泉信一の弟子でもあった中村正弘が戦後まもなくの焼け残った東北大学の和算書庫での出来事を書き残しています。

「ある日、GHQの紹介状を持参して訪れてきた旧制高校の教授がいました。その名前は私のような局外者にも知られているほどの人物でした。ほとんど命令調のことばで、(明治前日本数学史)の改定原稿を見せろという要求でした。当時のGHQの権力の大きさは超憲法的でしたから、下手に拒めば超国家主義的栄光を歌い上げている和算研究自体を戦犯的な扱いにしないとは限りません。政治の枠外にいる数学研究者としても成り行きに聞き耳を立てないわけにはゆきませんでした。平山さんの堂々たる対応には驚きました。原稿は学士院の管理下にあるのだから、その許可がなければご覧に入れられないというものでした。相手が退散したあとで、私は折角東京から来たのに気の毒ではないかと同情しました。平山の返事は鋭いものでした。GHQを笠に着て、他人の仕事をも米国に紹介して、業績とするような人々がいる。あの人もそのようなひとりだと。」

と『平山諦先生長寿記念文集』の中村正弘による序文に書かれています。

しかし、結果的には平山諦の入院中に原稿は持ち出されてしまいました。1955年(昭和30年)12月岩波書店から『明治前日本数学史』第1巻が出版されまじめました。ところがその校正があまりにも不十分でした。筆者も明らかな間違いを見付けたほどです。これに対して平山諦はおびたしい訂正を朱筆で入れた『明治前日本数学史』(全5巻)を残しています。1983年第3刷『明治前日本数学史』の補訂が20頁弱ずつ付いています。そこには上から大矢真一、下平和夫、平山諦の順序で名前が書かれています。筆者が平山諦に聞いたところでは、1960年(昭和35年)夏の終わり萩野公剛と下平和夫が仙台まで来て朱筆入り訂正本から書き写して行ったということです^{*1}。その後も平山諦は朱筆などで訂正を数多く入れていきますから、前者二人が上位に名前を入れるほどの貢献はしていないのですが、出版社が入れたものかもしれません。

*1 私家版『和算の誕生(後編)』附録 p.15

1952年(昭和27年)5月藤原松三郎遺著『日本数学史要』^{*1}(寶文館)が出版されました。この序文は泉信一と平山諦が書いています。

「けれども残念なことに先生はこの時すでに不治の病にかかられて居た。第一編の前半を終へられ筆をとられなくなり、後半は先生の口述を令嬢(東大教授岡義武博士夫人)が筆授したものである。」中略「第二編平山が「日本数学史」の中から予定されている個所を抜粋して作成したもので、」さらに「今年は先生の七回忌に当たる。……昭和二十七年五月」と書き残しています。このとき既に泉信一は東北大学を退職し東京都立大学へと移っていた時期です。両者の藤原松三郎への思いが表れています。

さて、平山諦は1968年(昭和43年)3月31日東北大学を定年退職をしました。この間において多数の著書や論文を書いています。主要な著書だけは、1954年(昭和29年)5月『方陣の話』(中教出版社)、1955年(昭和30年)『円周率の歴史』(中教出版社)、1956年(昭和31年)『割算書』復刻解説(日本珠算連盟)、『東西数学物語』(恒星社厚生閣)、1959年(昭和34年)『関孝和』(恒星社厚生閣)、1960年(昭和35年)遠藤利貞原著・三上義夫校注『増修日本数学史』補訂、1961年『和算の歴史』(至文堂)、1965年(昭和40年)『和算史上の人々』(富士短期大学)、1966年(昭和41年)『安島直円全集』(富士短期大学)、『会田算左衛門安明』(富士短期大学)などです。その他に、年間10編以上の論文と暦算書の復刻孔版書を世に出しています。ただ、論文を発表した雑誌は『算数と数学』『和算研究』『数学史研究』『月刊珠算界』など比較的な特殊なもので広く知られていません。調べてみましたが東北大学内での雑誌に書かれた文章を見付けることはできませんでした。恐らく東北大学内では他分野の学者たちとの個人的な交流は別として、孤立した状況であったのです。平山諦自身の姿も特異な出で立ちでした。土倉保は、

「(*平山)先生は、なかなかメカに強いといえますか、(*数学)教室では誰よりも早く自転車にモーターをつけてバタバタと音を立てて走っておられた姿が思い出されます。あの頃は肩までとどく長髪で和服のモンペ姿ではなかったでしょうか。当時としても異様な特異な姿だったと思います。和算の講義もされておられたはずですが、和服で資料の風呂敷包みを抱えられて歩く姿を拝見していました。」(*『平山諦先生長寿記念文集』pp.89-90)

*1 本書は、平成19年6月1日、勉誠出版から復刻された。解説は東京大学教授川原秀城である。ただその解説は7頁余しかなく誠に不十分である。また、「藤原小伝」も原資料に基づいて検討されたものではなく極めて不十分である。「和算と東アジア数学」この部分についてこそが解説者が言いたかったことのある。特に「朝鮮数学をあまりに軽視しており、早計にすぎると悔やまれてならない」と記している。このことが解説者の最も言いたかったことのある。解説者は朝鮮数学史を研究していることからの言説である。藤原松三郎にすれば「支那数学史」の附録の形で書いたものであるし、当時の史料の探索の限界から無理からぬ要求である。歴史研究において後々新史料が出現することは極普通のことである。その記述が不十分とするのは如何なものか。それにしてもこの復刻本は出版社の考えかもしれないが、表紙と背表紙にも解説者の名前は藤原松三郎と併記され、奥書にも経歴が併記されていて違和感を覚える。

と証言しています^{*1}。土倉保は泉信一の弟子で東北大学数学教室内では平山諦と交流がありました。恐らく平山諦の和算についての講義を聴講する学生は非常に少なかったと思われます。

平山諦の東北大学内での処遇は 1968 年 3 月 31 日定年退職する前日まで講師身分でした。1941 年 4 月講師として任用されて以来、27 ヶ年ずっと講師身分のままであったのです。平山夫人(和子)に 3 月 31 日助教授・教授に任用した辞令を見せて頂いたことがあります。助教授・教授と昇進することが学者の本望ではないかもしれませんが、部外者から見ても異常です。大学当局あるいは数学教室とすれば、平山諦の任用が和算研究所の予定所員で講座の枠外という考えであり、昇進が難しかったのかもしれませんが。それでも最後の 1 日である 3 月 31 日だけでも助教授・教授と昇進させたのは、退職金と年金への配慮と思われる。

ただし、平山諦自身はこのような状況を前向きに捉えて、研究と著作活動に専念できたと筆者に語っていました。雑務にとらわれず学究活動に時間を集中できたのはよかったのかもしれません。

VII. 自由を享受する時代(地方の研究者との連携)

平山諦にとって、定年退職は解放された自由を享受できるようになった時代と思われる。平山諦は東北大学内で和算に興味関心をもつ人々はなかったかもしれませんが、大学外それも地方の研究者との交流が非常に盛んになりました。この頃、福島、山形、宮城、群馬など各地に和算研究会が設立されました。その中でも特に福島和算研究保存会とは深く交流しました。その交流成果は孔版印刷で大部の『福島の算額(一)～(五)』^{*2}(法井八夫共著)を連作しました。これらは福島県の多くの人々の地道な協力と努力によります。1973 年(昭和 48 年)1 月 17 日仙台ホテルで、それら一連の業績について河北文化賞の受賞となりました。受賞理由は「和算研究の資料の発見と保存に貢献」でした。受賞の記念講演も行われました。この貢献は福島和算研究保存会の人々との共同受賞というべきものです。

1974 年(昭和 49 年 8 月 20 日『関孝和全集』(大阪教育出版)がありました。平山諦 70 歳のときです。本書の出版経緯については、本田益夫(香川短期大学教授)の跋文にあります。

「昭和四十四年(1969 年)の早春、数学専門家出身の大阪教育出版株式会社横山実社長と

*1 かつて筆者が平山諦に「大学では何を教えていたのですか？」と聞いたところ、「和算です」とやや慚然とした感じで答えてくれた。昭和 30 年代の大学数学科の雰囲気を知るものにとって「和算の講義」は別世界の出来事であった。

*2.その後 1989 年(平成元年)『福島の和算』(福島和算研究保存会, 蒼樹出版)から出版された。B5 版 564 頁の実に大作で、算額の問題が現代式で解答されている。内題の裏に「平山諦先生の八十八歳の誕生日に捧げます」とある。1970 年(昭和 45 年)『福島の和算』(福島和算研究保存会)、1982 年(昭和 57 年)『新福島の和算』(福島和算研究保存会)は B6 版でコンパクトにまとめられている。本書は校閲平山諦と記している。福島和算研究保存会で筆者が交流したのは、斎藤重千代、柴昌明、長沢一松、法井八夫、菅原元三などの各氏である。

同道、仙台の平山邸を訪ね、共々に浄書原稿を拝見、使命感を持った同社長の手よっての発行の協議となり、この道の印刷に深い経験を持つ笹気印刷に赴き、四者会談の上関孝和全集印行の合意が成立したのであった。」中略「当初から横山社長に話を持ち込んだ私は、五星霜の長きにわたり、忍耐強く遂にようやく完成の日を迎えた同社長に心からの慶祝を表さなければならない。」

とあります。横山実と本田益夫について平山諦は『関孝和全集』の再版のために跋文原稿(*未発表)を準備していました。それには、

「この全集が出版になったのは横山実と本田益夫のお陰である。両人は香川県立三豊中学校を動機で卒業した。横山は広島高等師範学校附属教員養成所数学科三年課程をしようわ六年三月に卒業して、すぐに大阪の出版社に就職した。本田は東京高等師範学校理科一部(数学)に進み、昭和七年三月卒業した。大阪府立中学校(いまの岸和田中学校)に奉職した。同じ大阪に住む両人の親交は続いた。本田は横山の依頼で、昭和八年夏休みには、長野県の温泉宿にこもって受験者向けの数学問題集を書いたこともある。その後、横山の努力で社運も隆盛となり、彼は大阪での教育出版社協会の理事長として活躍したこともあった。『関孝和全集』出版の印刷は、当然大阪の土地でやるべきであった。」「この全集には算木式の数式が多い。算木に形とって作る数字は二字で一桁の数を表している。この細長い活字を横に組み合わせて多桁の数を表現することになっている。頁数の少ないときは書けばよいが、頁数が多くなるとそうはいかない。細長い活字を三十種作ってそれを組み合わせなければならない。笹気印刷は最新の印刷技術の取り入れに急であった。活字印刷機の何台かはすでに休ませてあった。算木式の数を印刷するには活字に外ない。この印刷所はすでに『安島直円全集』も出版した。この仕事をやり通せる人は印刷工の辰巳さん^{*1}しかないと思った。縦書きであるが、数字は横に広がる。それが数行も幅を取ることがある。一頁を組むときに、縦に柱となるものが必要となるが、柱が立てられない事がある。辰巳さんは文選も組み込みも一人でやりのけた。私も工場に行つて相談を受けたことも度々あった。五年を経て昭和四十九年八月、八百五十頁の全集を出版することができた。」「仙台の笹気印刷は『安島直円全集』出版の実績があった。全集には貼り込みの複雑な図形が多かったからである。私は深く感謝している。印刷用紙については、横山はずいぶん心配した。使用の用紙を仙台に送って来たのは印刷直前であった。出版後二十年経った今日その良さを知った。」

『関孝和全集』出版に際して8頁の「関孝和全集だより」が出された。これに、出版に関わるエピソードが書かれていて非常に興味深いものがあります。それにも『関孝和全集』出版に至る歴史、それに関わった人々、平山諦の人生、それから平山諦と笹気印刷社長の笹木幸助との金銭を超えた交流、組版作業に当たった若き菅原克巳(33歳)の寝食を忘れた仕事ぶりを伝えています。

『関孝和全集』の出版に最も貢献したのは、横山実、本田益夫、そして笹気印刷であったことを平山諦が書き残しています。将来本書を読む人達は、編者の名前が前面に出ているので、そこに注目しますが、黒子になり縁の下の力になった人達こそ重要といえます。

*1 菅原克巳さんの間違いか

平山諦による編者序に出て来る人物は、故前山仁郎、千喜良英二、本田益夫、横山実、桑原秀夫、山田悦郎、戸谷清一、今井 秦(いたる)、野口泰助、萩野公剛、児玉明人、故遠藤利貞、故菊池大麓、故川北朝鄰、故岡本則録、故林鶴一、故三上義夫、故藤原松三郎、茅誠司、神田坤六です。団体は、大阪教育図書株式会社、日本数学史学会近畿支部、日本学士院、東京大学附属図書館、東北大学附属図書館、天理図書館、神宮文庫、笹気出版株式会社です。まず、序文を寄せた茅誠司(日本学士院会員)、神田坤六(群馬県知事)や故人は別として、いわゆる“大学教授”はいません。筆者は千喜良英二、山田悦郎、戸谷清一、野口泰助、児玉明人とは、交流したり面談したことがあります。千喜良英二は山形県立高等学校教員から短大教授をした人です。山田悦郎は民間の研究者でした。戸谷清一は珠算家でした。野口泰助は熊谷市立図書館長でした。児玉明人は古書店主でした。さらに桑原秀夫は日立造船株式会社社長・会長でした。萩野公剛は富士短期大学教授でした。今井 秦(いたる)は東京天文台、上海自然科学研究所、京都大学地学観測所などで技官をしていた人です。これらの人達と平山諦は交流していて、論文の別刷や著書、書簡が残されています。いずれの人達も地方の研究者か民間の研究者です。『関孝和全集』は、こうした地方の研究者や民間の研究者による努力の結晶というべきものです。印刷も出版も東京の大手出版社ではありません。実に些細なことを論じているとお思いでしょうが、ここにこそ日本における和算史研究の実情が表れています¹⁾。

VIII. 真実と向き合う

平山諦は1987年(昭和62年)「初期和算への西洋の影響」『富士論叢第32巻第1号』を發表しました。それまでの通説は“和算へ西洋の影響はない”ですから、大きな問題をはらんでいました。さらに続いて『数学史研究』に『算用記』と『割算書』、「二つの仮説」や『月刊珠算界』に「和算の発生」(第1回～第5回)を公表しました。1993年(平成5年)5月15日『和算の誕生』²⁾(恒星社厚生閣)を出版しました。平山諦88歳と9ヶ月のときです。この本の序文で「家康が江戸に幕府を開いた頃、イタリアから宣教師スピノラが来日した。彼は軽重9年から同16年まで7年間も京都の天主堂で布教の傍ら数学を教えた。これが我が国数学の誕生のきっかけの一つであると思って研究をした。……」中略「長年

*1. 比較として俳諧史研究について考えてみる。俳諧史研究者は大学の文学部に属しているものがたくさんいる。各大学文学部には近世文学担当者がいて、その中に俳諧史研究者が含まれている。ようするに大学内に確立されたポジションがある。もちろん、地方の研究者も民間の研究者もいる。俳諧史研究と和算史研究と比較するのは難しいが、江戸時代の文化としてその軽重はほとんど変わらない。和算史研究が文理融合の分野だけに所属場所がないのである。ここにこそ藤原松三郎が慨嘆する要因である。

*2 本書公刊前の1989年(平成元年)『和算の誕生(前編)』、1990年(平成2年)『和算の誕生(後編)』を私家版として数部を作成しています。この2書は『和算の誕生』(厚生社恒星閣)の元になったが、重複しないところもあり、特に後編第三章松永良弼、第四章山路主任、第五章宝暦の改暦、などは公刊されていない。

和算史を研究してきた者が近年のキリシタン史に触れ、本書で記したようにな歴史仮説^{*3}をもつにいたった。ともかく今後の詳細な研究の呼び水になれば、それで満足である。」と書き残しました。特に仮説にもとづいて本書を書いたとしていることです。また、本書が不十分であることを認め、“今後の詳細な研究の呼び水になれば”としていることです。すなわち、後に続く研究者への言葉でもあります。

平山諦自身これまで「和算へ西洋の影響はない」という立場に立っていました。80歳を超えてから自らのそれまでの考えを変えたのです。そして90歳に近づいて著書を公刊したのです。誰でもできることではなく、実に驚くべきことです。平山諦自身1998年6月22日93歳10ヶ月余で永眠しました。筆者の想像するに、平山諦は最晩年に近づいてきたことから、“真実と向き合う”ことを決断したと思われます。筆者が平山諦より直接聞いた話ですが、若いころ林鶴一に『割算書』の著者毛利重能はキリシタンではないかと聞いたが、肯定も否定もせず「返事がなかった」といいます。このエピソードから、平山諦自身「和算へ西洋の影響はない」という通説に疑問を抱いていたことになりま。ただ、林鶴一、藤原松三郎の両先生や諸先輩たちが唱える通説の重みもあり、また決定的な証拠を見出せないまま、通説に反することは言えなかったと思います。しかし、80歳を過ぎ入退院することもあり、“真実を語れ！”“真実と向き合え！”という心の奥底からの声に立ち向かうことを決断したと思います。

しかし、『和算の誕生』の公刊は大きな影響を及ぼしました。筆者の知る限りでは賛成する人達の多くが和算史の専門家というよりも関心を持つ人たちです。反対する人達は和算史あるいは珠算史の専門家と自認する人達であるように見えます。反対する人達的心情には“裏切られた感”が強くあるように思えます。平山諦は戦後和算史研究の第一人者として通説を暗黙の了解事項としてきたからです。通説の先頭に立っていると思っていた平山諦が、突然にそれまでと反対の学説を言い出したのですから、“裏切られた！”と思ったかもしれません。感情的になって罵る人もあったと筆者は聞きました。数年前京都大学数理解析研究所(RIMS)「数学史研究集会」の懇親会である研究者から『和算の誕生』にある松木新左衛門のことが問題だということを知りました。ようするに静岡市にある江戸時代の古文書『松木新左衛門聞書』に書かれている関孝和のことが疑わしいというものです。この古文書の存在と重要性について平山諦に申し上げたのは筆者ですから、責任があります。そこで2009年にRIMSで発表し、2010年RIMS講究録「駿遠(静岡県中西部)における関孝和とその兄内山七兵衛永貞の消息」になっています。

さて、筆者が平山仮説を支持する根拠を書きましょう。まず、和算の初期、すなわち安土桃山時代から江戸時代初期は、世界史的に見れば、大航海時代でありました。ここでは論を進めませんが、大航海時代当時の日本がおかれた状況を大きな目で見ることだと思います。巨視的な史観と微視的な史観が絡まったところから、平山仮説を裏付けるものが出

*3 歴史研究で、多くの研究者は仮説を立てて論を進めるということに非常に慎重というか臆病である。フランスのアナール学派創始者の一人リュシアン・フェーブル著『歴史のための闘い』(長谷川輝夫訳, 平凡社, 1995年)で仮説をつくり歴史研究をする重要性について繰り返し述べている。

てくると思います。たとえば 1622 年(元和 8 年)刊の毛利重能『割算書』の序文に旧約聖書の記述があります。これ一つとっても“和算への西洋の影響”を否定することは困難です。ともすれば専門家は微視的な史観だけに偏りがちです。巨視的なところから見ていると新史料が発見でき、また既存の史料に新たな光を当てることができます。言葉遣いとして不適切かもしれませんが、“重箱の隅をつついてはいるよりも面白い！”です。

IX. 平山諦の生涯とその遺産

93 年 10 ヶ月余の平山諦の生涯を速足で見てきました。その生涯をたやすく語ることはできません。私家版『和算の誕生(後編)』の最後の 17. 締め括りとして、「直接出版にかかわった書籍の総頁数は 10,991 頁で、謄写刷の一部は 100 部で、総枚数は 1,793 枚である。」「投稿した雑誌数は 30 種で、掲載数は 700 編以上となった。」と記しています。平山諦以外でこれだけの文章を読んだ人はいないと思います。未発表の草稿類もたくさん残っています。謄写刷本は、平山諦本人が蟬原紙一枚一枚に鑢板を下敷きにして鉄筆で書き、それをローラーをかけて印刷し、タコ糸で和装本に仕立てていました。このような謄写印刷を現代の若い人達にご存じないと思います。史料には異体字も多く、パソコンがあったとしても無理です。当時は図書館で史料の電子化などあり得なく、ゼロックスコピーもなく、青焼きコピーがあっただけでした。和算史料のように特殊なものの印刷出版は経済的に採算が取れません。従って、謄写刷本作成は、非常に重要な手段でした。読むだけでも大変なことなのに、その書くプロセスまで考えますと、その生涯を知るためには、想像力が必要です。

さて、平山諦の生涯を知るためには、明治、大正、昭和、平成という非常に変化の大きな時代変化を感じ取らなければなりません。たとえば、戦時下に於ける学術活動が尋常でないことは明かですが、日常生活の緊張感、物資不足、動員とあらゆる自由が奪われていました。交通状態も悪く、高速道路・高速鉄道などあるはずもありません。通信状態も非常に悪かったのです。そのような状況を筆者のように戦中生まれの者にとっても、戦時下の様子を肌で感じ取ることはできません。

そこで筆者自身が 1982 年(昭和 57 年)10 月静岡県磐田市近郊へ移住してから 1998 年 6 月平山諦が永眠するまで約 16 年間直接会って感じたことを書くことにします。平山諦は 78 歳から 93 歳余までのことです。平山諦の自宅の日常生活は和服でした。最初頃は新築になった 2 階の和室で話してくれました。筆者は休日の午後 1 時頃に伺い、午後 5 時頃までお話を聞きました。お話の内容は様々でした。林鶴一、藤原松三郎の両先生のことから、三上義夫との交流のことまで聞きました。筆者の自宅へ来てくれたこともありました。和算の誕生についての話が多くなったと思います。話し声がかすれて、少しずつ耳が遠くなり出しました。それでもワープロを駆使して和算書解説を書き、和装本を作っていました。少しずつ御自宅の 2 階和室で話すことよりも、1 階の居間で話すことが多くなりました。階段を上り下りすることが大変になったからのようです。居間では平山夫人(和子)も一緒でした。平山夫人と筆者との話が多くなると、少し離れて籐椅子に腰かけた平山諦から声がかかりました。そのころ筆者がお聞きすると、平山諦の答えは、ほとんど「忘れた！」ということが多くなりました。しかし、次回に伺うと、前回の質問関連資料を準備しておいてくれました。決して忘れていなかったのです。一番の驚きは、筆者が拙い知識を披歴

したとき、「知らなかった！」と言ったことです。夥しい和算書を調べ、豊富な知識を持つ平山諦が知らないといのです。ひょっとしてそれは非常に重要なことかと嬉しくなったことを思い出します。平山諦は喘息の持病がありました。自宅でも酸素を鼻から供給していました。入院することも多くなりました。入院しても元気なときが多く、筆者はベッドの脇で長時間お話を聞きました。東北大学のことや学界の裏話も聞きました。しばしば新聞広告裏に和算のことなど記憶のままに書き残していました。平山諦は毎日多数の手紙(封書)を書いていた。年賀状は非常に多く、それだけたくさんの人達と交流することを大切にしていました。

とりとめもなく、平山諦を追憶してみました。若い頃の雰囲気は感じ取ることはできませんが、最晩年に何度も長時間にわたって接することができたことは、稀有の体験であり望外の幸せでありました。平山諦からの大いなる遺産は、その友人知人を紹介してくれたことです。特に大阪教育大学名誉教授中村正弘、東北大学名誉教授土倉保、東京都立大学名誉教授本部均などから、長年熱心なご指導ご支援をいただきました。この三先生は、また多くの友人や門下生をご紹介していただきました。まさに東北帝国大学の遺産を注いでくださったと思います。

文献

- [1]小谷キン(著)『今日までの私』(私家版か, 1991年)
- [2]鈴木武雄「駿遠(静岡県中西部)における関孝和とその兄内山七兵衛永貞の消息」『RIMS 講究録,2010年』
- [3]東北帝国大学理学部自修会『自修会報(第21号)』(昭和10年12月)
- [4]林鶴一『和算研究集録』上下(東京開成館,1937年(昭和12年))
- [5]平山諦「初期和算への西洋の影響」『富士論叢第32巻第1号』(富士短期大学,1987年(昭和62年))
- [6]平山諦『和算の誕生(前編)』(私家版,平成元年)
- [7]平山諦『和算の誕生(後編)』(私家版,平成2年)
- [8]平山諦『和算の誕生』(恒星社厚生閣,1993年)
- [9]平山諦『和算の歴史』(ちくま学芸文庫,2007年)
- [10]平山諦『和算史上の人々』(ちくま学芸文庫,2008年)
- [11]平山諦博士長寿記念文集刊行会『平山諦先生長寿記念文集』(私家版,1996年8月)
- [12]平山諦・下平和夫・広瀬秀夫『関孝和全集』(大阪教育図書,昭和49年)
- [13]福島和算研究保存会『福島の和算』(福島和算研究保存会,蒼樹出版,1989年(平成元年))
- [14]福島和算研究保存会『福島の和算』(福島和算研究保存会,1970年(昭和45年))
- [15]福島和算研究保存会『新福島の和算』(福島和算研究保存会,1982年(昭和57年))
- [16]藤原松三郎(日本学士院)『明治前日本数学史』(岩波書店,1983年3刷)
- [17]藤原松三郎「余の和算史研究」『科学史研究,第11号』(科学史学会,1947年)
- [18]藤原松三郎遺著『日本数学史要』(寶文館,1952年(昭和27年))*平成19年6月1日、勉誠出版から復刻
- [19]藤原松三郎先生数学史論文刊行会『東洋数学史への招待—藤原松三郎数学史論文集—』(東北大学出版会,2007年)
- [20]リュシアン・フェーブル著『歴史のための闘い』(長谷川輝夫訳,平凡社,1995年)